

トルコの文化形成から学ぶ他文化との共存*

——日本と異なる寛容さ——

雨谷つゆ乃、大貫朋彦、佐久間千絵、
西水亮裕、吉田優花、和田郁未、渡邊知広

現代の文明の発展は、グローバリゼーションをますます加速させている。グローバリゼーションの進行により、文化交流は史上類を見ないスピードで行われるようになっていく。その中で、「他文化に対する寛容さ」は最も重要視されているが、同時にそれは自文化の喪失をも招きかねない。日本人は文化の吸収に長けていると言われる。しかし一方で、日本が異文化にさらされてきた歴史はまだ浅く、他国からの文化侵略にあい自文化を維持することは困難である。このように「異文化への寛容さ」と「自文化の尊重」のバランスをとることが21世紀のグローバル化の時代を生きる我々日本人に最も求められていることの一つである。

「異文化への寛容さ」と「自文化の尊重」のバランス感覚、それに最も長けているのは、私達と同じアジアに住むトルコ人かもしれない。本来モンゴルに生きる遊牧民族であった彼らは、西へ西へと住居を移す過程で、料理・宗教などさまざまな文化を吸収し、自分達のものとしてきた。またトルコ最大の都市であるイスタンブールは、東はアジア、西はヨーロッパという地理的要因のためにシルクロードにおける交通の要衝として栄え、かつてのローマ帝国、東ローマ帝国、ラテン帝国、オスマン帝国の首都が置かれた。その中で次に建てられた国は前の国の影響を受けながら自国文化を形成していったのである。そのため現在のトルコ文化も純粋な遊牧トルコ人のものではなく、それ以前の文化を吸収し、外部からの影響も受けながら造られてきた。シルクロードの重要拠点として栄えたトルコを学ぶことによって我々は「国際人としてのモデル」を見出すことができるかもしれない。私達は6つの分野（トルコ民族とは、トルコにおけるイスラム教、トルコの食文化、トルコの建築、シルクロードより伝わった調度品、トルコのEU加盟問題）からトルコという国家・文化を研究し、日本人の観点からトルコと日本の共通点と相違点を見出し、それら

*社会科学総合学術院トーマス・J. コーガン教授の指導の下に作成された。

の原因を考察する。

トルコ民族

トルコ人はモンゴロイドに属し、アナトリア半島とバルカン半島の一部に居住し、イスタンブール方言を公用語・共通語とするトルコ語を話す人々である。もともとトルコ共和国以前に存在した多民族国家のオスマン帝国の時代には「トルコ人」という民族意識は薄く、特にイスタンブールを中心とするエリート階層はトルコ語の一種であるオスマン語を共通語としていたものの、血統的な出自は必ずしもトルコ系とは限らず、自称は「オスマン人」であって「トルコ人」は田舎に住み農業や牧畜に従事する人々を指す語であった。アナトリアのトルコ系の言葉話すムスリムの人々をまとめて「トルコ人」と呼び、彼らの属すオスマン帝国を「トルコ帝国」と呼んだのは、むしろヨーロッパなどの帝国外部の人々である。オスマン帝国時代には、東ローマ帝国時代から小アジア・バルカン半島に住んでいたギリシャ人・クルド人・アラブ人・アルメニア人・スラヴ人などとの混血化が進んでいる。

ところが19世紀から20世紀初頭にかけて、ヨーロッパで生まれオスマン帝国に持ち込まれたナショナリズムの思想がキリスト教徒の諸民族の間に広まり、ギリシャを手始めにオスマン帝国からバルカン諸国が独立していき、一方でロシア帝国領のムスリムの間で生まれた汎トルコ主義がオスマン帝国に流れ込んで、エリート階層の間にも「トルコ人」意識が広まり始めた。

最終的には、第一次世界大戦によるオスマン帝国の最終的な解体と、続くトルコ革命により、アナトリアにトルコ共和国が樹立された結果、アナトリアに住みトルコ語を話すムスリムの間にトルコ人意識が定着する。しかし、元来トルコ語を母語としないクルド人をトルコ人に同化・統合しようとする動きは、トルコに複雑な民族問題を投げかける要因となっている。

(1) トルコ民族の歴史

トルコ人は、現在小アジアをはじめ、中央アジア各地、ヨーロッパの一部に広く分布している。アルタイ語族に属するトルコ語を話す民族は、実に1億人を越えるといわれている。このトルコ民族は現在でこそ、その多くが定住生活を送っているが、もとは遊牧を営む人々で、その起源は、現在のモンゴル西部アルタイ山脈に6世紀頃住んでいた、突厥にさかのぼるとされる。

トルコ民族は、まず、中国史に於いて歴史上登場することになる。中国人は3000年以上にわたり、北方民族に悩まされ続けてきた。万里の長城がそれをよくあらわしている。

突厥は、その北方民族のひとつである。突厥もつぎにあらわれるトルコ系民族ウイグルも、それぞれ独自の文字を持っていたことで知られている。

西暦13世紀末、すでに現在の中近東と呼ばれる地域は、ほとんどイスラム化していた。オスマン・トルコは、同じトルコ系のティムールとも14世紀～15世紀にかけて戦っているが、16世紀、スレイマン1世の治世時最盛期をむかえる。その領土は、北アフリカ・アラビア半島・小アジア・ハンガリー・南ロシアにまで及んでいる。

しかし、第一次世界大戦に敗れたことで、その繁栄の面影は崩れていく。英・仏をはじめとするヨーロッパの植民地（帝国）主義の最大の犠牲者は、トルコ人かも知れない。そのような中、現在もトルコの国民的英雄であり続け、誰もが偉大なお父さんと親しむトルコ近代民主主義の父、ケマル・パシャが、オスマン・トルコ帝国の歴史に終止符を打つ。

ケマル・パシャの最大の功績は、政治と宗教の分離政策にある。トルコで政教分離が成功したことの理由には、ひとつトルコの地理的な要因も大きいと思われるが、このことがアジア地域でいち早く共和制をしることにもつながった。トルコは、憲法制定も女性参政権の獲得も、日本を抜いてアジアで最初であった。

(2) トルコ人という概念

そもそも「トルコ人Türk」という概念は、1924年に制定された憲法で初めて公式に「国民としてトルコに住居する者は、宗教及び人種の別なく‘トルコ人’と呼ばれる」と定義された。「トルコ国籍を有する者」＝「トルコ国民」というこの定義は、基本的に「トルコ国に国籍の紐帯で結ばれた者はすべてトルコ人である」という規定にも引き継がれているが、実はここにいう「トルコ人」は、「トルコ国籍を有する者」＝「トルコ国民」という意味と、「トルコ民族」という意味との二重性を持っており、「国民としてのトルコ人」と「民族としてのトルコ人」との区別は曖昧である。非トルコ系のムスリム国民に対する同化政策は、後者の側面を強調したものだったといえる。しかし、非トルコ系ムスリム国民は、国内法上少数民族としての地位と権利を認められていない一方で、トルコ国内法の枠内において市民権上の法的差別はなく、「トルコ国民」として平等の権利と義務を有することもまた事実である。自身の民族的アイデンティティを保持しつつも公的にそれを主張することなく、「トルコ国民」として共和国の理念と制度を受け入れた者は、この二重性を主体的に利用したといえる。一方、世俗主義国家であるはずのトルコにおける非ムスリム系市民の「特別扱い」は、ナショナリズムと宗教の不可分性を示している。

トルコにおけるイスラム教

トルコでは人口の99%がイスラム教徒（ムスリム）である。宗教の帰属が身分証明書

の記載事項なため、このデータは容易に正確にとられている。その大半を占めるスンナ派の人々は、スンナ派の中でもファナフィー派が大多数で、このファナフィー派はイスラム教信仰を個人の解釈に委ねることを特徴としている。そのためコーランや規律の解釈は個人の解釈に任せられているので、イスラム教の信仰国のなかでは自由度が高い。このように、宗教の信仰心が比較的強く個人の自由として委ねられている点が日本人の宗教観と似ている。

トルコは同じイスラム教国と違い、徹底した政教分離政策を行っている世俗国家であり、中東で唯一強烈な民族意識に基づく国民国家を形成した。しかし、トルコの政教分離政策にもいくつかの問題点がある。トルコ共和国成立後、イスラム教を政治から排除し近代化を推し進めてきたが、その間何度かのクーデターが起こっている。イスラム勢力が政界に復帰し、イスラムを公的な領域に持ち込もうとした政権もいくつか誕生したが、その度にクーデターが起きてイスラム勢力は政治から追放された。

無宗教の国日本から見ると、政治と宗教という相容れない二つのものを分離することは至極当然のもののように思われる。しかし、人々の生活の隅々まで厳格に定められているイスラム教を信じるトルコにとって、イスラム的な考えから政治を完全に独立させることは大変な苦勞を要することなのである。トルコのこれからの情勢は、近代化をはかるにあたってどのようにイスラム教と付き合っていくかにかかっていると言っても過言ではない。

トルコはイスラム教国で唯一、完全な政教分離を実行している。第一次大戦での敗北が、近代化という課題をトルコ共和国建国に突きつけた。しかしイスラム教は政教分離をするのが困難であるにも関わらず、何故トルコは徹底的に政教分離に成功したのか。それは、トルコが柔軟で、国際的な状況を読み取ることに長けていたからである。他のイスラム教国と比較すると、トルコの政教分離は大変まれであることがわかる。そのことからトルコ人の柔軟さが読みとれる。

トルコの食文化

トルコ料理は世界三大料理の1つと評される、トルコ料理の特徴は、なんといっても種類の豊富さにある。トルコ民族もまた多くの食文化を取り込み、独自の料理体系を築いてきた。そんなトルコ民族は元来モンゴル高原で生活する遊牧民であり、主に羊肉やヨーグルトを食べていた。9世紀以降、中央アジア一帯に移動した際、イスラム教と出会い彼らの食文化を吸収した。その後アナトリアにまで進出し、オスマン帝国を建国して、領土を拡大するにつれて彼らの食材圏はさらに広がった。オスマン帝国は、アジア、アフリカ、ヨーロッパの三大陸に広がり、さらにシルクロード・草原の道・海の道の3つの東西ルー

トの利を得ていた。このように東西の様々な民族や食材が流通し、豊かな食文化を形成してきた。

現在のトルコにおける主食はパンである。例えばイタリアのピザの原型とも言われる「ビデ」などがある。またトルコはヨーグルト発祥の地でもあり、野菜や豆のペースト、スープ、サラダのドレッシングになど様々な用途に使われる。コーヒー文化を世界に広めたのもトルコである。1516年、エチオピアで発見されエジプトまで普及されていたコーヒーは、オスマン帝国によるアラブ地域の併合によってトルコに伝播し、当時オスマン支配下にあったバルカン諸国にも16世紀後半に伝播した。トルコにおいては信仰や薬用よりも嗜好品として飲用され、1555年現在のシリア、ダマスカスにコーヒーの喫茶店が誕生したが、2号店が現在のイスタンブールの旧市街地パフタカレにできた。その後16世紀末頃にはコーヒー文化はフランス、イタリア、イギリスなどヨーロッパ全土へ伝わっていった。現在トルコ人の生活に欠かすことの出来ない茶は、もともと中国の雲南省が発祥の地。その茶葉が北上してモンゴル、ロシアに渡り、カスピ海を通過してコーカサス、トルコ黒海沿岸まで入ってきた。その茶葉が通った道は「お茶の道（チャイの道）」と呼ばれる。16世紀に世界のスパイス市場を牛耳ったのはオスマン帝国であり、世界のスパイスは東南アジア、インドからアラビア半島を通過してトルコ領土、中でも当時の首都であったコンスタンチノーブル（現在のイスタンブール）に集められ、原産地を隠してヨーロッパへ送った。このルートは「スパイスの道」と呼ばれ、スパイスの伝道はヨーロッパの食生活を変えたと言われている。クミンシード、コリアンダーシード、胡椒、シナモン、マスタード、ミント、ハーブ類など、多種多様なスパイス、ハーブ類は現在もトルコ料理に使用され、世界最大級のスパイスマーケットもある。

以上のように、日土の食文化の共通性として、異文化の食文化を柔軟に受け入れてきたことがわかる。長らく日本は中国の食文化の影響を受けながらも独自に発達させ、明治時代以降は西洋の食文化を取り入れてきた。トルコにおいても、東西の食文化を受け入れ、その結果、肉料理以外にも豊富な種類の料理体系を形成した。しかし食文化の受け入れ方には差異が見られる。トルコは東西交流の拠点として栄え交易の中心地であった。そのため多くの食文化を受け入れるだけでなく多文化への影響も大きなものであった。それに対し、日本は異国の食文化を憧れの対象として受け入れた面が強い。よって日本の食文化を異文化に伝えることは少なかった。

トルコの建築

(1) 宗教建築

ここでは主にオスマン朝時代のモスクを扱う。トルコは古くはキリスト教が広く受け入

れられていた土地であるが、その後イスラム教が取って代わり、現在は国民の99%がイスラム教徒である。オスマン朝はイスラム圏において強大な権力を保持していた時期であることから、この年代のモスクがトルコの特徴を最も顕著に現している。オスマン朝時代のモスクには、巨大なドームと巨大な尖塔（ミナレット）が大きな特徴として挙げられる。

巨大なドームを備えた理由は、キリスト教文化を取り入れたことにある。もともとイスタンブールは東ローマ帝国の首都であり、多くのキリスト教建築物が存在した。現在でも一部のキリスト教建築物は、改修を加えた上でイスラム教建築として使われており、例えばアヤソフィアは、偶像崇拜が禁止されているイスラム教であっても未だに建物内に聖母マリアのモザイク画が残っている。また、オスマン朝はウィーン包囲などを通してキリスト教文化に触れる機会があり、他文化のデザインも積極的に取り入れた結果といえる。ミナレットは、時の権力者の威厳を見せ付けるという意味合いが強く、外観を雄大に見せることが目的だった。

このようにトルコのモスクは、多文化を取り入れ雄大さを売りにして建造されており、元来のイスラム教的存在意義は薄い。よってトルコのモスクは他国のイスラム建築より世俗的で、現実的な性格を持っていると言える。一方、日本の宗教建築を考えると、制度的な理由で神道と仏道が一体となる「寺社一体」が一般的であることから、やはり他国から取り入れた文化を日本オリジナルの文化に取り入れる傾向があり、現実的である国民性の側面を伺えるのである。

(2) 民家

トルコの民家は日本ではあまり見られない自由な構造（外観）をもつものが多い。トルコの民家は、二階部分が突出していることが多々ある。これは、トルコ民族がアナトリアで定住を始めたことに起因している。当時のアナトリアでは、以前の建造物を資材として利用し、それをもとに上階を積み上げ、新たな建築物にすることが多かった。そのため、一階部分は石材、新たな二階部分には木材を積み上げるという方法がとられていたため、一階と二階が独立していた。二階部分の突出により、広い空間が創造される。これこそ大遊牧集団であり、地平線ばかり見る生活をしていた名残である。

この自由な発想によるデザインは、建築方法ないし建築材料によっても支えられている。日本の民家は大黒柱を中心に設計される。また檜や杉などのまっすぐな木が存在するため、似たような形の民家が多い。しかしトルコでは、低木や節の多い松が使われていたため、柔軟な発想・形の民家が生まれる。

以上からトルコ建築には宗教建築・民家と一貫して、合理的な側面が存在する。トルコ人の建築はもとある文化を土台として利用し、それを自分の文化へと吸収してしまう。宗

教建築では、キリスト教建築を土台にイスラム文化を作りあげた。民家では、もとの建築物を資材として利用する。この異文化の受容と順応においてトルコは日本と似ている。しかし、トルコと日本には決定的な違いがある。トルコはそこに存在するものから取り入れるが、島国である日本は自ら欲して吸収する。

シルクロードより伝わった調度品

ここまでトルコにおけるイスラム教・食文化・建築を見てきたが、これらはどれもシルクロードの影響が色濃く見られる。ここでは、シルクロードを伝わりトルコに入ってきた調度品について記述する。

(1) 陶磁器

陶磁器はシルクロードを経由して中国より伝わり、トプカピサライからは12000点の中国磁器が発見された。また中国産の陶磁器の影響を受け、ビザンツ帝国時代・イズニックにて陶磁器生産が始まった。トルコ周辺における陶磁器は、イスラム教独特の幾何学模様が用いられたが、時には中国風の雲文様も用いられた。当時ペルシアのコバルトは評判が良く、中国では回教の国の青「回青」と呼ばれた。しかし元時代、回教徒商人が良質のコバルトを提供し彼らには焼けない景德鎮の磁器の上に中近東の人達が喜ぶ文様を施し、それを再びペルシアやアラビアで売ると国際的な商いが始まり、染付の大量生産が景德鎮で始まった。またオスマン帝国時代にトルコにおける陶磁器の生産・使用は最盛期を迎え、宮殿にも大量にタイルが使われた。

(2) 織物

絹は中国で発達した。中国は絹糸虫とされる野生の蛾の種類はインド、メソポタミア、小アジアなどに生息していたが桑の葉を飼料として計画的に多量に収穫できる養蚕技術をおこし発展させた。そして長い糸を作り出し、経糸と緯糸を交錯させるという染織技術も発展させ絹織物を生み出した。

そして絹織物とその養殖技術はシルクロードを伝って養殖技術は紀元前2世紀ホータン地方、3世紀インド、5世紀ペルシア、6世紀ビザンツと西側世界へ伝わった。

中国の絹織物が西へ運ばれていたとき牧畜を生業としていた住民は家畜の毛を原料として織物作りをしていた。毛繊維の特質は中国の生糸とは全く異なり、それゆえ織物法も絹織物とは違っていた。絹織物と違い、中国において毛織物は指先で行うつづれ技法が用いられていた。しかし絹織物で用いられていた機械的で効率のよい技法が西方地域に伝わると、毛織物の分野に応用されるようになった。そしてササン朝ペルシアにその技術が伝わ

ると、それは世界技術として不動のものとなった。

上記のようにシルクロードにおけるトルコの関わりを見たが、これらの中で共通しているのは、トルコは異国の調度品を自文化に馴染ませ、さらに対外に発信している点である。さらにいえば、独自の文化として育てているものさえ見られる。この点からトルコは外来文化に寛容であり、独自の文化に変える柔軟性を持ち合わせ、この新たな文化を世界に発信していく力を持ち合わせていると言える。

トルコのEU加盟問題

(1) トルコがEUに加盟を望む理由

EUは国家への信頼を高めるため、EUの加盟国の制度を利用して経済状況を改善しようとしている。EU加盟国からの経済援助や、ヒトの移動の自由で雇用状況を改善しようとしている。一方で、トルコの国際的な立場を作り上げることで国家への信頼性を高めようとしている。トルコがEUに加盟することで宗教間の対話を図り、貿易を拡大し、キプロス問題の解決をアピールしている。

(2) コペンハーゲン基準

加盟申請にはコペンハーゲン基準を満たす必要がある。その基準は四点（地理的要因、政治的基準、経済的基準、法令の調整）から構成される。

地理的要因とは、加盟したい地域がヨーロッパに属していることである。トルコは一部が含まれているため、これを満たしている。政治的基準は、内政の安定やマイノリティの民族への配慮に関する基準である。トルコでは言論の自由が一部認められておらず、クルド人に公でのクルド語の使用を禁じているため、この基準を満たしているとはいえない。経済的基準は、自由市場へ移行する際の国家の耐久力に関する基準である。トルコは現在、国内経済の低迷と失業率の上昇という問題を抱えている。そのため、トルコのEU加盟は、安価なトルコの労働力の国外流出を招く恐れがあり、EU加盟諸国の雇用状況を悪化させると懸念されている。法令の調整は、法制度における民主主義の尊重に関する基準である。世俗主義を標榜するトルコ軍はイスラム主義勢力の伸長に対して、2度にわたるクーデターや与党になった福祉党に圧力をかけ非合法化するなど、政治介入をたびたび起こしている。

(3) トルコがEU加盟に苦戦する理由

まず一つ目にトルコがEUに入れない理由として、表現の自由が確立されていないことがある。この例が刑法301条である。これは国家侮辱罪をトルコにおいて制定したもの

で、これにより刑務所へ入れられた作家、新聞記者は数多く存在する。文化に対し柔軟性のあるトルコであるが、自国が中傷されることを極端に禁じたこの法律は、トルコが多民族であるため国を揺らぐことのない確固たるものにしようとする政府の意思の表れである。

二つ目にあげられるのが、人権保護の問題である。トルコにはクルド人と呼ばれる独自の文化、言語を持った民族集団が約1000万人、トルコの人口から見ると1/7が暮らしている。長年に渡り政府はクルド人に対し、トルコ国内でのクルド語での教育、放送を一切禁ずるという文化的抑圧を加え続けていた。2005年以降のEU加盟交渉にあたって、EUから人権保護の要求を受けたトルコ政府は、近年クルド文化への緩和政策を打ち出すようになったが、未だ重い規制は根強く残っておりこの緩和政策が人権保護を満たしているとは言いがたい。

三つ目がキプロス問題である。キプロスは1974年の内戦をきっかけにトルコ系住民保護を目的としてトルコ軍が侵攻した後、南北に分断された状態にある。キプロス統合への支持が2000年「加盟のためのパートナーシップ」の短期的課題に盛り込まれたこと、及びキプロス共和国の2004年EU加盟が2002年に決まったことは、北キプロスとトルコにおける政策転換の道を開いた。トルコは1959年以来EU加盟交渉を開始し、2004年には欧州理事会によりEU加盟条件であるコペンハーゲン基準を達成したことを評価され、2005年からは加盟交渉の開始にこぎつけた。

以上のトルコのEU加盟問題に対する姿勢から、「トルコ人は自分達自身がトルコ人である」という意識が強い国民であると考えられる。ケマル・アタテュルクが西欧化を推し進め、トルコは完璧なイスラム国家からイスラム諸国の中で最も西欧近代化された国家に変わった。イスラム国家の中で唯一政教分離も実現させた。制度や形式的なものはどんどん変化した。たとえば、アラビア文字はラテン文字に変わり、一夫多妻制は一夫一婦制になった。しかし、トルコの思想や人々の思考に関わるものは変わらない。トルコのEU加盟を困難にさせている最も大きな障害であるキプロス問題を考えても、トルコの国家意識や仲間意識が高いことが伺える。シルクロードによって、多文化のいいところを多く取り入れてきたのがトルコであり、多種多様な民族が暮らしていたオスマン帝国のことを考えてみてもわかるように、トルコは多くの文化から成り立っている。だからこそ自分達自身がトルコ人であるという強い意識なしでは、アイデンティティを喪失してしまう。そして、東にアジア西にヨーロッパという地理的要因がトルコ人の民族意識を高めたと考察される。私達日本人は間違いなくアジア人だが、トルコ人はアジア人でも西欧人でもなくトルコ人なのである。

結論

上記のように、トルコ人は遊牧民としての歴史とシルクロードを利用した貿易、オスマン帝国時代での領土拡大により、実に様々なモノ・文化・宗教に触れてきた。しかしこれらの事実に対して共通して言えることは、トルコは伝わってきた文化を見事に吸収し、自文化に定着させ応用し、自文化との融合を図り、さらにそれを他国へも発信しているということである。これはまさに、彼らトルコ人の遊牧民としての歴史と、トルコの地理的条件が彼らに強いてきた結果であろう。彼らはモンゴル高原から現在のトルコへの移住の過程において多くの文化・価値観に出会い、それらを吸収していった。また同様に、人・文化の行き来が激しく、宗教・政治が目まぐるしく入れ代わったトルコにおいて、彼らは異文化・価値観に対して寛容でなければ商業で国を栄えさせることはできなかった。

他国の文化を吸収することが得意と言われる日本人とトルコ人であるが、その決定的な違いは「なぜ異文化に寛容なのか」ということに起因している。トルコ人はアジア・ヨーロッパの間に商人として生き、異文化に触れながら生きることを日常としてきた。また商人としての彼らにとって、異文化交流とはまさにビジネスそのものだったために、彼らは異文化に寛容なのである。

一方で日本人は、長い歴史の中で異文化と交流することは極めてまれであり、異文化に対して憧れや畏敬の念を抱いていた。飛鳥・平安時代においては仏教や中国からの調度品が、明治時代においては欧米の生活様式が重んじられてきた。現代でも依然その状況は変わらないが、特に西洋のファッション、食文化、言語などに対する日本人の憧れは異常なほどである。日本の歴史を通して、異文化を吸収することこそが崇高とされ、異文化に対して寛容であることは一種の社会的ステータスを示すものであった。つまり、日本人にとって文化はただ外から取り込むべき対象であって、外へ発信するべきものではなかったのである。ここにまさに、日本人とトルコ人の文化への姿勢の違いが見て取ることができる。文化交流がますます激しくなる時代において、他文化への寛容さは重要視されることである。しかし他文化を吸収することに専念し続ければ、おのずと自文化は衰退してしまう。グローバリゼーションの進む時代を生きる私達日本人は、トルコ人を見習い、他文化への寛容さを持つだけでなく自文化を維持し、積極的に発信していくことを身につける姿勢を持つべきである。

参考文献

- 板垣雄三『イスラム世界がわかる』亜紀書房、1998年。
- 石毛直道・鈴木薫『世界の食文化（9）トルコ』農山漁村文化協会、2003年。
- 渋谷幸子『トルコとは何か』藤原書店、2008年。
- 内藤正典『激動のトルコ—9・11後のイスラムとヨーロッパ』明石書店、2008年。
- 中村廣治朗『イスラム教入門』岩波新書、1998年。
- 長澤和俊『シルクロードを知る事典』東京堂出版、2002年。
- 羽田正『モスクが語るイスラム史』中公新書、1994年。
- 八谷まち子・間寧・森井裕一『EU拡大のフロンティア—トルコとの対話』、2007年。
- 山内昌之『帝国のシルクロード 新しい世界史のために』朝日出版、2008年。
- 宮田律『中東イスラム民族史—競合するアラブ、イラン、トルコ』中公新書、2006年。